



# 共力体制で乗り越えよう

NPO 法人ファザーリング・ジャパン東北  
共同代表理事 竹下 小百合

「新しい様式」と言われる生活が始まって、1年が過ぎました。目に見えないウイルスとの闘い、いつ終わるのかわからないゴールに向かい続ける。不安な日々を過ごしているのは皆さん一緒だと思います。毎日、ニュース等で報道される感染者数を見るたびに、医療従事者とその関係者、そして昼間、子どもたちを守ってくださる先生方、児童館の皆さんにまず、この場をお借りし感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

さて今回、寄稿をするにあたり、私は1年前の自身が投稿したSNSを振り返ってみました。小学校が休校になってから新学期が始まるまでの約90日間、毎日、その日の我が家の様子をSNSへ投稿していました。今、読み返すと1年前の自分を褒めてあげたいくらい(笑)本当によく頑張っていた!当時、長男は小学4年生、次男は1歳(保育園)。毎日、長男と私はゲームのプレイ時間でケンカし、次男は家の中のものをしまくり。泥棒でも入ったの?というくらい部屋の中は散らかっていました。それに比例するかのごとく、私は心に余裕がありませんでした。今、思うと「毎日どうしていいのかわからない」気持ちをSNSに書くことで、自分自身を落ち着かせていたのかもしれない。さらに書くことだけでは足りず、夫に「私が元気であることだけでよし!」と云ったくらいです。(このとき、夫はそんなことを言った私に驚いていました。)

昨年のGW明けくらいからでしょうか。テレワークという働き方が仙台でも浸透し始めた頃、数人のママから「私もテレワークなのに、パパが寢室を仕事部屋にしてこもっている。子どもの世話は、私。しまいにはお昼ご飯を催促され、イライラする。」「君はテレワークで家にいるのだから、家事は君がして!」と夫に言われた。家にいても仕事はしているのに。」といった相談メッセージが来るようになりました。そのたびに私は「お互い大変だけ

ど、頑張ろうね。」「態度で示すのではなく、言葉にしてはっきり伝えたい方がいいよ。」など返信していました。そしてメールを読むたびに、まだ男女の格差=パパはこうあるべき、ママはこうあるべきという「思い込みの枠」があることに残念でなりません。

明治安田生命が行ったコロナ禍における夫婦仲のアンケートによると、夫婦仲が「良くなった」と回答した方が2割いたそうです。理由としては、「コミュニケーションや会話の機会が増えたため」が最も多かったそうです。その一方で、世に出てきた言葉のひとつに「コロナ離婚」があります。夫婦・パートナー間に特化した相談業務を行っている私のところには、昨秋から少しずつ相談が増えてきました。ここ最近、男性よりも女性(ママ)からの相談も増えています。女性の場合は、相談する前から今後の方向性、いわゆる「離婚」か「修復」いずれかに決めていらっしゃる方が大半です。離婚を希望する方は「産後の辛かった時、家事・育児に協力してくれなかった。その時は子どものため、と我慢しました。しかし、このコロナで夫は変わらない。そう確信した瞬間、残りの人生を一緒に過ごしたくないと離婚を決めました。」とおっしゃいました。

今、こういった社会状況の中だからこそ、夫婦でこれまで以上に「対話」というコミュニケーションを取ってほしいと思います。しっかり向き合って話すこと、これに勝るものはありません。共に力を合わせ「共力体制」を組むことで、子どもたちの笑顔の花を咲かせてほしい!そう願っています。

